2012 年 5 月 31 日放送

「第 75 回日本皮膚科学会東部支部学術大会①　大会を終えて」

群馬大学大学院　皮膚病態学
講師　安部　正敏

はじめに

第 75 回日本皮膚科学会東部支部学術集会は、国立大学法人群馬大学理事・副学長兼群馬大学大学院医学件研究科皮膚科学石川治教授を会長として、平成 23 年９月 17 日と 18 日の２日間、群馬県前橋市のベイシア文化ホールと前橋商工会議所会館で開催されました(図１)。

図１　会場のベイシア文化ホール（群馬県民会館）開始前でひっそりしています

平成23年３月 11 日に発生した東日本大震災の影響で第 110 回日本皮膚科学会総会が中止となったことから、本学会の開催も危ぶまれましたが、県内の実行委員を中心とする先生方の多大なるご協力で無事開催することが出来ました。まずは、この場をお借りして、本学会開催にご尽力いただきました関係者の皆様に御礼を申し上げます。

本学会の特徴

本会は、震災後に被災地を含む東部支部で開催することから、石川会長は東日本復興支援を大きな柱とし、通常の学会運営にプラスする形で様々な企画を行うことを早期に決定されました。具体的には会場内に募金箱を設置し、参加される先生方に義援金をお願いしました(図２)。そのために、学会運営は徹底的なコストダウンを図りました。具体的には、教室スタッフを総動員した人件費の削減。シャトルバスの一般路線バス増便

活用、さらにコングレスバック廃止や会場内案内表示の簡素化などにより、参加費を過去の学術大会より3,000円の値下げを行いました。この値下げ幅を義援金へ御協力頂けるシステムとしました。

また、共催セミナーや情報交換会での食材は、敢えて被災地である東北各県から調達することで、間接的な被災地支援を行いました(図３)。

図２　総合受付に設置された手作り募金箱　多くのご厚志をお預かりいたしました。受付も教室スタッフ総出でお出迎え

この食材手配は刻々と物流システムが変化するのに加え、放射線の問題があり、開催直前まで調整が必要となり、実際にはかなり大変な作業でした。さらに、群馬の名産もお楽しみいただく工夫を行いました。例えばモーニングセミナーでは、高崎駅の隠れた人気駅弁にちなみおかゆをご用意しましたが、会場前で調理するシステムの構築は、多難を極めましたが、幸いご好評を頂きました(図４)。また、石川会長は、ご自宅で待つご家族にも群馬を味わって頂く様に、全国的に有名になった当地発祥のラスクをプレゼントしました。

図３　東北各地から手配した食材による情報交換会ご参加頂くだけで被災地支援に繋がる様、手配を行いました

図４　モーニングセミナーのおとも「朝がゆ」　会場前でサービスする出来たてでさっぱりしたおかゆは、特に前日美酒をたっぷり楽しまれた先生方にも大好評

さらに、企業展示ブースではスタンプラリーを開催しました。これは、本学会の被災地支援の理念にご賛同いただいた県内企業から無償提供された豪華景品抽選会です。残念ながら１等の伊香保温泉ペア宿泊券はあたりませんでしたが、協賛企業からは義援金も頂くことが出来、更なる復興支援に繋がりました。結局、参加された先生方のご支援

のおかげをもちまして総額 298,822 円を、日本赤十字社を通じ東日本大震災の被災地へ義援金として寄付させていただきました。今回、この様な企画をご理解いただき、ご賛同頂きました先生方に改めまして感謝申し上げると共に、東部支部所属の先生方を含む被災地の皆様の一刻も早い復旧・復興をスタッフ一同、心よりお祈り申し上げます。

ところで、震災による本学会開催の危機は、まず一般演題募集の際に訪れました。当初設定した締切が、震災発生２か月後であったため、締切日には何と９題のみの応募に留まりました。当然、東部支部を中心とする先生方はこの時期、学会抄録どころではなかったのでしょう。しかし、これでは一般演題の発表時間がすべて１時間と特別講演並みになってしまう恐れがある為、我々も大慌で、度重なる締切延長と広報活動を行いました。結局、多くの先生方のご協力で、最終的に口述およびポスター計 111 演題の応募を頂き、ほっと胸を撫で下ろしました。被災地からの応募も少なくなく、自らの生活とご多忙な診療業務の傍ら、貴重な演題をご発表頂きました先生方に心より感謝いたします。

学会当日の様子

さて、学会当日を迎えた前橋市は特に震災の影響もなく、無事 2 日間がスタートしました。会長講演を固辞された石川会長は 15 分の挨拶の中で、ご自分の歩みを自ら選曲された BGM にのせて振り返った後、本学会の震災支援の意義を述べられました。本学会は３つの特別講演をお願いしました。群馬大学大学院医学系研究科腫瘍放射線学教授兼重粒子線医学研究センター長　中野隆史先生による「がんの重粒子線治療の現状と将来」では全国の大学に先駆けて群馬大学に導入された重粒子線治療の概要をお話頂きました。京都大学再生医療研究所教授　田畑泰彦先生による「再生医療のフロンティアと未来」では細胞移植と生体組織工学の側面から、再生医療についてわかりやすく解説頂きました。安城更生病院神経内科部長　安藤哲朗先生による「日常診療に生きる医療メディエーション」では、皮膚科医にも必要不可欠な医療紛争の予防について、実践に直結する具体的なお話を頂きました。

招請講演にはマレーシアから Steven Chow 先生をお招きしました。先生はクリアカットなご講演は勿論、誰にも笑顔で気さくにお声掛けをされるお人柄で、ご多忙の故僅か１夜の前橋滞在ながら、多くの参加者と交流を持たれました。

一方、教育講演は２演題でした。群馬大学生体調節研究所付属生体情報ゲノムリソースセンター教授　畑田出穂先生による「一卵性双生児の DNA は同じか？エピジェネティクス研究への誘い」は DNA のメチル化の基礎、群馬大学大学院病態制御内科学教授森昌朋先生による「メタボリック症候群とエネルギーホメオスターシス」は実際の臨床と共に、先生方が同定された関連蛋白の意義を講演され、多くの聴衆を魅了されました。さらに、より実践的な知識習得を目的とした「一人医長のための外来診療のコツ」では和歌山県立医科大学皮膚科准教授　山本有紀先生による「美容皮膚科」、前群馬大学准

教授で、現在伊勢崎市民病院皮膚科部長の田村敦志先生による「初歩からの楽しい皮膚外科～上達のコツ～」が開催され、フロアからも活発な討論が行われていました。本学会のシンポジウムは旭川厚生病院の橋本善夫先生、長岡赤十字病院の伊藤薫先生、前橋赤十字病院の大西一徳先生オーガナイズによる「皮膚科勤務医の現在・未来」、札幌皮膚科クリニックの根本治先生、前橋皮膚科医院の大川司先生、のぐち皮膚科クリニックの野口俊彦先生オーガナイズによる「皮膚科開業医師の現在・未来」の２つが開催された他、前回大会会長でいらっしゃる相場節也先生ご発案による大学間の垣根を越えたCPC も継続開催しました。これは各大学から若手の先生方２～３名にご参加いただき、学会前日からグループで診断についてディスカッションして頂き、学会最終日にご発表ののち、座長の浜松医科大学皮膚科学教授の戸倉新樹先生、伊勢崎市民病院皮膚科部長の田村敦志先生よりコメントを頂きました。昨年同様優勝者には表彰とともに商品が贈呈されました。

この他、日本皮膚科学会「皮膚科の女性医師を考える会」の女性皮膚科医師のためのメンタリングプログラムが開催され、事務局ではこれに関連して女性参加を容易にすべく、託児所は予約なしで当日受け付ける体制をとりました。さらに、皮膚科診療をトータルとしてレベルアップすべく、「皮膚科エキスパートナースを目指して」と題した看護師向け勉強会を開催しました。２日間で、共催セミナーはスポンサードセミナーが３会場、ランチョンセミナーは６会場、イブニングセミナーとモーニングセミナーが３会場、スイーツセミナーといいものセミナーが２会場と多彩なセミナーが開催されました。ここに共催頂きました企業の皆様に深謝申し上げます。

おわりに

最後に、記念講演に触れさせていただきます。今回は中央群馬脳神経外科病院理事長の、医者もできる噺家中島英雄先生に「人はなぜ笑うか」と題したご講演を頂きました。桂前治としてプロの噺家としもご活躍の先生の話術に会場は魅了された一時間で、群馬県だから聴けたご講演と好評でした。こうして、企画段階で多難を極めた第 75 回日本皮膚科学会東部支部学術集会も、多くの先生方のご協力のたまもので、盛大に無事終了いたしました(図５)。本来この様な学会総括は会長が果たすべきでありますが、石川会長は実務を担当した小職に敢えて与え

図５　学会を無事終えて…石川治会長（中央）と教室スタッフ

て下さいました。石川会長、そして実行委員、大学スタッフともども、ご参加いただきました多くの先生方と関係者の皆様に深謝申し上げ、終わらせていただきます。